Night Of Cinderella

三河あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎｉｇｈｔ　Ｏｆ　Ｃｉｎｄｅｒｅｌｌａ

【Ｎコード】
Ｎ２３３１Ｂ

【作者名】
三河あおい

【あらすじ】
神様からもらった１週間、僕は大事な人と生きていく。たとえ、結末がどんなに悲しくなろうと・・・

プロローグ（前書き）

正直、恋がしたいなぁと思う、そんなお年頃。

プロローグ

あなたにとって1番大切なモノはなんですか？
万人に聞くと、大体が金やら命等、価値のあるモノを大事にする。
けど、希に、みかけはなんでもないモノだが、ソイツにとっては一つしかない命より大事だという馬鹿も存在する。

僕もその一人だ。

僕と彼女が出会ったのは、去年の１２月２４日、雪が静かに降り注いでいた夜だった。当時（高校２年の）不良だった僕は、一人で公園のブランコで一服するのが日課だった。その日もいつものように公園に着いた時だった。かすかにだけど、トイレの方から叫び声が聞こえた。僕は急いでトイレに向かうと、一人の女が5、6人の男にからまれていた。
「やれやれ・・・」
めんどくさいけど、助けないわけにはいかなかった。僕は男の肩を軽く叩いた。男が振り向くと同時に、すかさず頬に右のフックを与えた。
「な、なんなんだよ、テメー！」
僕が一人倒すと、彼らは一斉にこちらをむいた。
「暗い夜道に気を付けろ、て言われなかったか？」
そういうと、僕は彼らのところへ駆けていった。

「あの、大丈夫・・ですか？」
「2、3発もらっただけだよ。お前の方が大丈夫なのか？」
「はい、大丈夫です。」
トラブルも片付いたあと、僕らは、ベンチに腰をかけていた。
「ふふ・・・・」

会話もなく、ただ黙っていただけなのに彼女は急に笑いだした。
「なにがおかしい？」
「だってすごいじゃない？」
彼女は自分の将来の夢を自慢するような話し方で喋りだした。
「クリスマスの夜に変な人にからまれて、最低なクリスマスだなぁ、なんて思ってたら、まさか、同じクラスのヤンキー君が助けてくれるなんて、絶対ないでしょ？」
確かに。そんな状況まずありえないし。
「つーかだ。同じクラスだっけ？見たことないんだが」
「だって君、あんまし学校に来ないからでしょ。」
「あ。それもそうだな。ところで、あんたの名前は？」
「私？時姫亜依子。あなたは？」
「王子紫音。」
「ふふ、お互い変な苗字だね。」
好きな食べ物、映画の話、そんなどうでもいい話をしているときでだった。
「ね、私達、付き合わない？」
あまりに突然な話題に僕は呑み込めずにいた。亜依子は言葉を続けた。
「だってさ、考えてみて。今さっき知り合ったばかりなのに、問題も無く話ははずむし、さっきだって、少しありえなさそうな出会いかたしてたじゃん。」
僕はようやく事態が飲み込めてきた。つまり・・・・
「これは、運命の出会い・・・・と？」
「・・・・・・うん」
そんな風にして、僕らは付き合うことになった。亜依子の言う、少し、ありえない出会いで。
そして、今日、１２月１７日、僕は彼女に線香をあげていた。

神からのお告げ（前書き）

今言うけど、これ、新作だから。

神からのお告げ

彼女は、交通事故死だったらしい。車道にいた小学生を助けに行って、その小学生は助かったのだが、亜依子は、死んでしまったらしい。病院にも駆けつけたのだが、その時には、すでに心臓が停止していた。性格上、アイツらしいな、と思う反面、何で勝手に死んだんだよ、という怒りもあって、僕はどうすることもできなかった。

葬式もすみ、僕は初めて亜依子と会ったあの公園へ行こうとしたときだった。

「おい、そこの青年。」

後ろから、不意に誰かに話し掛けられて驚いた僕は、すばやく振り返ってみた。けど、人の姿はおろか、猫やら、野良犬やらがいたくらいだった。

「気のせいか・・・・」

僕はまた振り返って、少し歩くと、

「おい、無視すんな、無視。」

僕は何をみても気にしないぞ、という決意をしてゆっくり振り返った。大方予想どうりだった。

「ふぅ、やっと気付いたか。」

一連のセリフは、そこにいた真っ白い猫の言葉だった。かなり低い確率で予想できたとはいえ、見てみたら、やっぱりビックリした。

「・・・・・・なんなんだ、あんた」

これで精一杯言ったつもり。

「信じる信じないは青年の勝手だが、聞いて驚くなよ。」

僕は本当に驚かないつもりだった。

「わしは神じゃ。」

なんて言われるまでは。

「う・・・嘘つけ。神様が猫のはずは・・・・」

「化けちゃ、ダメか？」
なんだ。化けてるんだ。僕はなんか安心した。
「ところで、その神様が僕になんの用ですか。」
僕がそう聞くと、質問を無視して、『神様』は突然
「お前の一番大切なものは何だ？」
重々しい質問をしてきた。以前の僕なら、『自分自身だ』なんてことを言っていただろうけど、今は違う。今の俺には自分よりも、もっと大切なものがある。それは、
「亜依子だ。時姫亜依子だ。」
僕は迷わずに言った。そういうと、『神様』の鼻で笑う音が少し聞こえた。
「そんなに大事か」
「ああ。命よりもな。」
僕がそう言うと、『神様』は猫の顔で大きく笑った。（正直、結構怖い）
「いいだろう。その娘を生きかえらせてやろう。」
突然言ったこの言葉が僕にはひどいジョークに聞こえた。僕からすればふざけているようにしか見えなかった。
「それって、ふざけて言ってんの？」
「何を言う、本気だよ」
この『神様』がいつに無くまじめな声色でそう言った。僕は本当に飛び跳ねそうになった。しかし、である。
「その代わり、だ。」
僕は驚いて『神様』の顔を覗いた。条件がついてくるのが以外だった。
「生き返るのは、1週間、そして夜だけだ。」
「なんでだよ！！」
僕は背中をつまんで持ち上げる（猫ですから）と、叫ぶように反論した。
「なんで1週間なんだよ。ちゃんと生きかえせばいいだろ！！」

「それが出来るなら、この世の中、わしは善人だけを生き返らせているわ！！！！」
僕以上に大きく、怒りのこもった声が耳にひどく響いた。
「これだけは、言っておくぞ。」
『神様』が念を押すように言った瞬間だった。
「紫音君？なにしてるの？」
亜依子の母親が顔を出した。絶対なんか勘違いされているのが分かった。
「いや、この猫、実はか・・・・・」
「ニャァァ――ォ」
コ、コイツ・・・
「まぁ、ショックを受けるのはわかるけど・・・・・」
十分、いまのがショック受けたよ。

「で、僕に何を伝えたいの？」
僕は、亜依子と会ったあの公園まで移動すると、猫に聞いてみた。
「生きかえる時間は、１週間というのは、あくまで最大、という話だ。今から言う事は、１週間以内に終わらない方法だ。」
「いや、意味わかんないんだけど・・・」
この猫は、話が急すぎて、ついていきずらい。いやなやつだ。
「要するに、あの娘と１日でも長く居たかったら、わしの話を絶対に忘れるな。常に頭において置け。」

こんな風にして、僕と亜依子のいろんな意味の新生活が始まろうとしていた。１週間後、僕らはどうなるかなんて、予想すら出来なかった。

神からのお告げ（後書き）

はぁ・・・・・雪見てぇ・・・・・

『再会』

時計はもう7時をまわっていた。もしアイツの言った事が正しければまちがいなくいるはずである。
「ただいま」
僕は少しだけ、小さな希望を抱えて、ドアを開けた。
「あら、おかえり。今日はちょっと遅かったね。」
母親にそう言われて、僕は初めて気がついた。亜依子がいた時は、毎日5時には帰っていたことを。
「ま、そんなことより。なにあの娘？あんたもしかして・・・」
母親は続きを言わず、なにを思ったのか、ウフフフと、静かに笑っていた。この時、僕だけ時間が止まったような感じがした。僕は確かめるために、急いで2階に上がり自分の部屋のドアを開けた。開けたその先にはありえない光景があった。
「あれ？ちょっと遅かったね。なにかあったの？」
そこには、普通なら棺に入っているはずの亜依子の姿が、生前のままの元気な亜依子の姿があった。
「あ・・・・」
なにかを言おうとしたが、涙がにじんで言葉が途切れてしまった。
「ん？どうしたの？」
「いや、眼が乾いてて、少しいたかっただけだよ。」
僕はバレバレな嘘をつきながら、眼をこするフリをして、涙を拭っていた。そして、
「僕と付き合い始めた時、僕をどういう表現したか、覚えてる？」
僕は彼女にそう尋ねた。もし、神の言う事が本当なら・・・・
「ちなみに言っておくが、あの娘は事故死に関する記憶は消えているから。」
神は突然、言い出した。僕は少し不思議に思った。事故の記憶が消

えるということは、だ。その時は何も起こってなくて、普通に僕らはいたのだろうか。
「いや、そういうことじゃなくてだな。記憶を置き換えたんだ。少し別のものに。だから、その以前の記憶もバッチリ残っている。」
「へぇ・・・・それって、記憶を置換した、てことなのか？」
「そう言ってるんだよ。」
なるほど。僕は理解した。つまり、事故の状況を、別の何かに変えただけで、昔から何も変わっていないって事か。けれど・・・・
「変わりにおいた記憶は、どんな記憶なんだ」
「一応事故に遭ったが、運良く無傷だった、という奇跡に。」
「あんた・・・最高だな。」
「というわけで」
僕は、話の本題をようやく思い出した。
「お前とあの娘の関係とか、周りの関係、記憶は全てあの娘が生きている者として見てくれる。だから、別に隠さなくても、普通にしていれば何の問題も無いからな。」
「ＯＫ。わかったよ」

「へ？どうしたの急に？」
「いいから」
神にそう言われたが、やっぱり気になってしょうがなかった。僕は亜依子の昔の記憶を確かめてみた。
「ん～、確か、『サンタさんからのプレゼントが本当に届いたね』だよね？」
その通り。僕はこの言葉がとても印象的に覚えていた。さて、
「じゃ次。僕がこの日に間違っていたことは？」
「これは覚えているよ。イブなのに、普通にクリスマスって言っていたことでしょ。」
これも正解。それじゃ、
「これで最後な。イブの日と同時に大切な記念日があったが、知っ

てる？」
これは、本人じゃないと絶対分からないだろう、という問題。もしこの亜依子が本物なら間違い無く当てるだろう。それに、僕にとっては本当に記念日のような日だった。
「・・・私の誕生日！！」
そう言うと、亜依子は僕に飛び跳ねるような勢いで抱きついてきて。キャーキャー騒いでいた。
「て言うか、自分の誕生日ってさすがに忘れないでしょ。今日どうしたの？なんだか質問多かったけど？」
「いやいや、覚えているかどうか聞いただけだよ。」
「あははは。誕生日はありえないって。」
疑った自分が本気でバカバカしかった。なんで亜依子を疑うような事をしたのだろう。冷静に考えてみれば、ここまで陽気な性格をした亜依子がニセモノのはずが無かった。
「・・・よかった」
「ん？なにか言った？」
「いや・・なにも。」
僕はとにかくこの時間がたまらなく愛しかった。この時間は、どんなつらい時間も忘れられそうなほどの、力があった。僕はずっとこの時間が続けばいいな、と心の底から思っていた。そんな風にして、彼女のいる至福の時間を過ごして、１日目の夜を終えた。

町の人々は、彼女の生きていたこの記憶を無くしていた。それでも、僕は、涙を抑えていた。

彼女がいる世界とそうじゃない世界の大きな違い

昨夜の、魔法のような時間を終えて、もとの日常に戻った時の変化は言い表せないほどの異常なものがあった。この世界は彼女が死んでいる世界であって、昨夜の世界が神がくれた魔法の世界ということを、ひどく実感した。

「なぁ、大丈夫か？」

僕がそれらのことを考えていたら、不意に話しかけられた。

「・・・・・あぁ」

「まぁ、亜依子が死んで落ち込むだろうけど」

「大丈夫。落ち込んでねーよ。」

僕は平然にしていたけど、内心、僕が悲しいのは、死んだこと以上に、本当は生きているのに生きているとは言えない、言うことができない『ルール』が存在した。つまり、この学校に彼女はもういなかった。僕にとって、学校はただただ苦しい場所にしかならなかった。

ルール2　自分が体験していること、ルール等、全ての真実を言えるのは、一人だけ

2日目の夕方、

7時をまわる前に、僕は帰宅した。7時になると彼女がどのように現れるのかが気になっていた。僕は近くにあったラルクの古いアルバムを聞いて、時間を潰していた。

ゴーン　ゴーン　ゴーン・・・・

気がつけば僕の部屋の振り子時計は7時になっていた。僕は音楽を止め、静かに彼女の帰りを待っていた。そして、

「ヤッホー。また来たよー」

玄関から、やけにテンションが高い亜依子の声が聞こえた。しかも、

死んでいるのに堂々と入ってくるから、ヤバイと思ったが、その直後、
「やぁいらっしゃい。今日も元気だねぇ。若いってうらやましいわ。」
と、いう風に普通に会話していた。そういえば、7時からは、彼女が生きている、というのが、普通になるのを、思い出した。
「じゃおばさん、失礼しまーす。」
そう言うと同時に、亜依子が階段を昇ってきていることが分かった。しかも、ものすごい速い速度で。
「ちわーす。今日も来たよう」
ドアを勢い良く開けて、亜依子は現れた。いつもながら、驚くもんだ。
「おう。まぁ、入れよ。」
「入ってるっちゃ、入ってるけどね。」
そう言いながら、入ると、亜依子は思いついたように言った。
「ね、今日は図書館に行かない？」
そう言うのは部屋に入る前に言うもんだろ・・・・

「おお。やっぱり凄いね。」
そろそろクリスマスも近いせいか、普段そんなに人のこないのに結構なほどの人数が図書館にいた。本当、クリスマスって凄いな。
「じゃ、お先に失礼！」
亜依子は子供のように、本棚へと駆けていった。やっぱり、見ていたら少し悲しくなってくるが、今はその感情を抑えて、楽しく図書館を満喫することに専念した。
「といっても、僕、本苦手なんだけど・・」
よく考えたら、亜依子は本が大好きであって、僕は元不良ということもあって本は大がつくほど苦手である。最近、その時になって思い出すことが多いような気がしていた。
「とりあえず、てきとうにさがそ・・・・」

数十分後、僕らは腰をかけて、静かに読書していた。僕も本を探してみたが、僕にあう本は見つからなかったから、結局『ブラックジャック』という漫画で落ち着いた。対する亜依子も、同じ作者の『どろろ』という漫画を読んでいた。僕には聞いたことが無かった。

「この漫画ね、来年映画でやるらしいよ。」

それも初耳だった。といっても、僕はこの『どろろ』という漫画にはいまいち興味が湧かなかった。変なタイトルだし。

「それ、面白いの？」

「うん。グットだね。」

亜依子が面白いといったものは、大体本当に面白いものが多かった。僕はこの映画に期待を寄せた時だった。

「あの・・・亜依子さん・・ですよね」

後ろから不意に話し掛けれられ、僕らは驚いた。その相手は、ウチと同じの学校の冬服を着て、荒れた髪をして、丸いメガネをかけた、多分秀才と呼ばれる人種であった。話し掛けられた亜依子は、少し驚きながら、その男と会話をした。

「うん、そうだけど。なに？」

「確か・・死んだのでは？」

正直、この中で一番驚いたのは、誰でもない、僕だろう。そう言いきれるほど、僕は驚いていた。この時間帯に聞くはずが無い言葉をはっきり耳にしたからだろう。それに、それを言ったら、亜依子は消えてしまう・・・いたって普通にしている、この男の正体を知りたかったが、

「こっち来い！」

僕は強引に男を亜依子から離して、トイレの方に連れて行った。そして、僕は、この男の正体をさぐるために、入っていった。

『桜井秀寿』

「なぜ、彼女が死んだこと知ってるんだ」
僕はもうなにがなんだか理解できなかった。7時からはこの会話はありえないはずである。
「逆にボクが知りたい。なんでみんな朝、昼は普通なのに、この時間帯になるとあの人が生きてるみたいなことを言うんだ？」
彼は冷静に尋ねているが、全く理解できていないらしかった。僕はあのルールを思い出した。
すべてを教えられるのは一人だけ
「・・・・わかった」
僕は少しためらったが、なるべく理解してもらうため、僕は神の事、彼女の事、ルール等をまとめて説明した。

「・・信じられないな」
表情には出さないものの、彼は驚きを隠せなかった。
「よし。ボクも協力しよう。余計な事は一切言わないよ。」
幾分理解できた様子で彼は言った。それにしても・・・・
「ボクの名前は桜井秀寿。よろしく。」
「あぁ、よろしく。」
なぜ、桜井には亜依子の存在どころか、記憶も完全に残っているのだろう。神が言っていたルールだと、見れないはずだが・・・・・

「ねぇねぇ、何がどうなってるの？死んでいるって何が？」
亜依子は不安な口調で僕らに聞いてきた。確かに、何も知らないのに、いきなり死んでいるって言われたら、当然不安になるだろう。
「いや、ごめん。僕は霊感がとても強いらしくて、あなたの後ろに幽霊がはっきりいたもんだから、つい・・」
「なぁんだ、そっか。それならいいか。あと、あなたじゃなくて亜

依子て普通に呼んでいいよ。」
「そう、わかった」
桜井がすっかり、僕には思いつかないような凄いウソで切り抜けてしまっていた。それどころか、普通に仲良くなっていた。ひとまず、僕は安心のため息をついた。
「あ、ゴメン。もう遅いから帰ろうね。じゃ、また明日。」
亜依子は時計を見ると、『どろろ』を借りて、一目散に去っていった。僕も時計を確認してみたら、１１時５５分になっていた。あと５分ということとか。それは桜井も理解していた。
「ていうかさ。よくあんなウソ思いついたな。さすが頭いい奴だな。」
「あんなウソ？それって、あの幽霊の話の？」
「うん。それそれ」
「ああ、あれ？マジな話なんだけど・・」
僕は驚いて何も言えなかった。
「・・冗談じゃなくて？」
「うん。マジ。」

あれから1日たって、3日目の夜、
「へぇ・・。」
亜依子はすっかり、桜井の体験した幽霊の話に夢中になっていた。
今日は、桜井も読んでの3人で集まっていた。
「で、それで・・・どうなったの、その幽霊」
「それがよ・・・両足が無いのに窓辺に立っていたんだよ。」
桜井が言い終わったと同時に、
「キャーーーー！！」
と叫んで、布団をかぶって、隠れていた。そういう所が、僕にはとても可愛く見えた。
「そろそろ遅いし帰った方がいいんじゃねーの？」
僕は2人にそう促した。実際、時計は１１時４８分をまわっていた。

「そうだな。じゃ、また明日。」
「私も。ではでは。」
亜依子がそう言って部屋を出る寸前、足を止めて、僕らにこう言った。
「そうだ。明日、3人でショッピングでもしない？」
僕はこのメンバーでショッピングするのに奇妙な感じがしたが、僕は我慢して、笑顔で親指を立てた。

3人でのショッピング

僕は桜井のいる4組の教室へ向かっていた。亜依子といた時の記憶が残っているかの確認である。教室につくと、思ったより早く桜井を見つけられた。彼は、机に座ってなにかホラー系の小説を静かに読んでいた。

「やっぱり、彼女の事、覚えてる？」

僕は桜井の肩を叩いて、そう尋ねた。

「あぁ。はっきり覚えてるよ。なんなら、彼女が読んでた本と、どんな話で怖がっていたか言おうか？」

「いや、別にいいよ。」

思ったとうりだった。変な言い方だが、桜井だけが神がつくった世界に支配されていなかった。僕にはもうさっぱりだった。

「今夜の約束、忘れるなよ。亜依子を悲しませたら、僕は許さんぞ。」

「わかってるよ。」

とりあえず僕は、ショッピングの約束の確認をしておいた。

4日目の夜、

「なんだか、以外な組合わせだよね。」

外の街並みを僕と桜井と亜依子という、奇妙なメンバーで歩いていた。正直、変な感じがした。一応死んでいる身の亜依子と、ちゃんと生きていて、亜依子の事情を知っている桜井と、なんか複雑な感じがしてならなかった。

「ねぇねぇ、あれ見て」

亜依子の指を指した方向を見ると、とても丁寧に飾られたイルミネーションに彩られた商店街が並んでいた。

「おぉ・・・・」

それはとても綺麗だったから、僕は感動のあまり、その一言しか言

えなかった。桜井の反応は、かけていた眼鏡をかけ直して、じっくり見入っていた。
「よし。じゃ、・・」
「「レッツら、ゴー」」
僕と亜依子は死語を叫びながら、商店街へと走っていった。桜井は、いまいち雰囲気にのりきれず、呆然と立ち尽くしていた。

「へぇ〜」
「やっぱり凄いね。来いよかったな。」
僕と亜依子は商店街に入って、さらに感動していた。おくれてきた桜井もいろんなイルミネーションに目を移していた。
「・・・で、どうするの、これから」
息を整えた桜井は、僕らにそう尋ねた。
「そうだな、ひとまず・・・」
「私もひとまず・・」
僕らはそう言って、ある所に目を向けた。桜井が僕らの向いた方向を見ると、その店内の様子は一言で言うと、寿司が回転していた、という表現が1番似合っていた。
約４０分後、
「美味かったな。寿司って久々に食べたな。」
「ホント。また来たいね。」
「僕に全額負担は、どうかと思いますけど」
僕らは満足（うち1人が落胆）のうちに、回る寿司を体験した後、
「よし、1時間は自由時間にしないか」
僕は2人に呼びかけるように提案した。この自由時間の提案には、二つ、理由があった。
「それもそうね。」
「じゃ、一時解散で。」
「桜井。一緒にちょっと来てくれないか」
一つは、落ち着きたかった。もう一つは、ある真相を確かめたかっ

たからであった。

桜井の真実（前書き）

おら^ーー！！！

今日はこれで勘弁してやる。

桜井の真実

僕と桜井は一旦商店街を出て、一通りの少ないベンチに腰をかけた。桜井にとっては今から僕はどうなるだろうかと不安になっているということが予想できた。実際、手が少しだけ震えていた。

「・・僕に話って？」

静かになって少し気まずくなった時に、桜井から口を開いた。僕は、前から知りたがっていた事を桜井に聞いてみた。

「もう一回聞くけどよ、なんで亜依子のことを覚えているんだ？」

そう聞かれると、桜井は少し考えてこう言った。

「多分だけど、霊感とか・・・」

「ウソつくな」

桜井が全て言い切る前に、僕は途中でさえぎった。

「は？なんで？何でウソをつく必要があるんだよ」

「ごまかしたいんだろ？」

「だから何をだよ！！」

桜井は怒こってベンチから立ち上がり、僕をにらみつけているのが分かった。

「神様、いるんなら説明してくれよ。」

「しょうがない。承るとしようか。」

あの神の声がベンチの下から聞こえた。正直、僕も桜井もビックリしていた。まず、本当に出てくるなんて思ってなかったし。まぁ、神が返事を返すと、ベンチの下からゆっくり姿を現した。

「あなたが・・・まさか」

「そう、神だよ。」

僕はもう慣れている風景（猫がしゃべっている風景に慣れるのもどうかと思うが）だが、桜井は初めて見たにもかかわらず、思ったよりは動じてはいなかった。

「ほう。驚かないのか」

「幽霊なら嫌って程見てきたし。」
なるほど。それでか。桜井はかなりの強心臓とみた。
「リアクションがつまらん奴だな」
「いいから、話を続けろ。」
脱線しかけたが、なんとか持ちこたえたようだ。
「小僧、なぜ死んだはずのあの娘が生きているとか、その時の記憶が鮮明に残っているか知っているか？」
桜井は黙って首を横に振った。まだウソをついているのが分かった。
「・・なるほど、嘘だな。」
「だから、何がウソなんだよ！」
それはどうやら神にも分かったことらしかった。
「青年、さては説明してないな」
「いや・・確信が無かったし。」
「・・・やれやれ」
神は呆れたようにため息をついた。そして、座っていた桜井の足の上に乗ると、顔を近づけてこう言った。
「いいか、わしは神なんだ。正直に言えば、話はすぐ済む。まず説明するぞ。」
神は迫力のある顔を近づけ、迫力のある声で桜井を圧倒していた。
さすが神。
「まず、あの娘が見えること事態はたいしたことじゃない。けど、記憶が完全に残っているのには、霊感など、なんの関係も無い。ましてや、わしがつくった世界の中ならなおさら無縁だ。わしの言いたいことは分かるか？」
全て理解している僕には分かった。
「小僧はあの娘を愛してたんだろう？」
そう言うと、桜井が軽くため息をつく声が聞こえた。
「・・・いや、愛していたというより、恋していた、という方が正しいな。」
やっぱり。桜井は亜依子が好きだったのか。僕がそう思っていると、

ばれては仕方ない、と言わんばかりに自分のことを話し出した。
「僕、実は亜依子のこと、好きだったんだ。けど、僕は友達も少ない方だし、話せるほどの勇気も無かったんだ。そして、紫音と付き合いだしたていう噂を耳にした時、僕はこれでいいんだ、と自分に言い聞かせたよ。これで彼女のことを諦めきれるから、て。でも、僕は彼女が死んだ時、後悔したんだ。せめて、彼女に、好きだって言えばよかった。だから・・・・」
桜井は、いつの間にか泣いていた。最初の方が、どんな感じだったかは忘れてしまってけど、僕は、この桜井秀寿という男を、可哀相に思った。
「・・・辛かったな」
僕に今出来ることは、この男を慰めることしか出来なかった。
「なぁ、神様。泣いているけど、これはナシにしていい？」
「なにを言っておる。わしは暖かい寝床を探すのに必死なんだぞ。今はおまえ達にかまっている時間すら、もったいないわ。」
そういうと、神はなにも見ていないように、何処かへ走り去っていった。
「とりあえずだ。今は、この一時を大事に過ごしていこうぜ」
「・・そうだな。」
桜井は涙を拭いて、しっかり僕の言葉にうなずいた。
「亜依子を待たせちゃまずい。行こうぜ。」
「おう。」
桜井が珍しく僕の前を走り、僕はその後を追っていっていた。僕らは明るく、暖かい恋人の元に走っていった。

４日目の、雪が止んだ頃の夜、僕は同じ意思を持ち、同じ女性を愛した、本当の友達が出来た。もちろん、亜依子を渡すつもりはない。

桜井の真実（後書き）

1日5話・・・
疲れたな～～～

2度目のショッピング（前書き）

特になし

2度目のショッピング

「もぉ～、遅かったじゃない。何してたのよ？」
僕らは、そう言われると、笑いを隠すために、うつむくしかなかった。言葉だけ聞けば、間違いなく怒っているように聞こえるけど、亜依子はパフェを頬張りながらそれを言っていた。この状況で彼女がなにを言おうが、まったく説得力がなかった。むしろ、この人面白いなぁ、というような感じにしか思わなかった。
「まったく～。後1時間ちょっとしかないから、パパッといっちゃお。」
そう言われて、僕はすぐに時計を見てみた。時間は10時47分を指していた。なんだか変な感じがした。まるで彼女は自分の帰る時間を知っているかのような発言だった。無意識ということはわかっているけど。
「決められた時間に、しかも12時にまでには帰るって、まるでシンデレラみたいだよな。」
「そうよね。ていうか普通でしょ？夜中までに帰ってくるって」
「まぁ、そうだけど・・・」
確かに、それが普通だけど、今の僕らにとっては桜井の言っていることが普通に聞こえてしまっていた。多分、言った本人が一番複雑だろう。
「じゃ、時間も迫ってきてるし、もういっちょ行くとするか」
思い立った僕は、席を立ち二人に聞いてみた。はっきり言って、僕はこの微妙な雰囲気がかなり苦手だ。
「そだね。甘いものもとったし、いきますか。」
パフェを食べ終えた亜衣子は、さっきまでのちょっとした不機嫌が気のせいだったかのような陽気さで、席を立った。桜井はとなりでいつの間に頼んでいたオレンジジュースをすべて飲み干して立ち上がった。

「ほんじゃ、いきますか。」

僕らは先ほど行った商店街にもどって、再びショッピングをしていた。みんな周りのにぎやかさに影響されてか、楽しくしていた。実際、ここは人も多くていろんな種類の店や、イルミネーションが施されていているからどんな人でも楽しめるだろうと思う。僕の両端にいる二人が周りを見渡しては、『わぁ』やら『おぉ』なんて言って、感動しているのがいい例だ。

「なぁ、ここ行ってみていいかな？」

桜井が珍しく僕に頼み込んできた。僕は黙って桜井の指を指す方向を見ると、何のことはない、普通のカレー屋だった。

「なんでここ？」

「・・・ボク、カレーに目がないんだ」

桜井の意外な事が分かった。

「あぁ～、やっぱ無敵だな、ドライカレーは」

「おい、若干口調変わってるぞ。」

気持ちは分かるが、桜井という人間は、カレーを食べると人一倍元気になってしまうらしい。まるで顔が変わりたてのアンパ〇マンだな。

「なぁ紫音、お前どこかに行きたいとか、そういうのはないのか？」

「別に」

正直、まったくというほどなかった。僕自身、欲しい物とかないし、ショッピングとかには興味がなかった。

「・・・亜衣子はどうする」

とりあえず、パスをまわした。

「んん～・・とりあえず、この商店街見て周りたい！」

「かしこまりました。お姫様。」

半分は冗談だが、半分はかなり本気で僕は言った。なんせ、もう時間も少ないことだし、僕らは素直に言うことを聞いた。

「あ～、やっぱ無敵だな、商店街。」
「お前もかよ。つーか商店街のほうかよ。」
ツッコミを入れてはいるが、僕も同じ意見だった。とても綺麗だし楽しかったし、言うことなしである。言うとしたら『ブラボー！』の一言だった。
「また行きたいな。」
「そうね・・って、あ！」
亜衣子が不意に腕時計を眺めると叫ぶように大声に言った。時計は１１時５２分になっていた。
「じゃ。バイバイキーン」
いい年してそれはないだろ・・・さすが亜衣子、とても自然に見えた。僕も桜井も今日一日中幸せであった。
けど、僕はある重大なことを忘れていたことを、明日の夜、思い出すことになった。

決意の六日目～午前

冷静に考えたら、その通りであった。今日は２３日。明日は彼女の誕生日であって、それと同時に彼女がいなくなる期日が同じだった。
「お前がこの前言った通り、亜依子はシンデレラのようだな。ほんのちょっとの僅かな時間しかそこにいられない・・・まんま、話の通りだ。」
僕は無力な自分がほとほと嫌になった。わかっているのに何もできない、することができない。僕はそれを考えると、腹が立ち、座っていた席のテーブルに、拳を思い切り下ろした。
ガァン
という音が響くと、教室にいた人間全員が静まりかえり、こちらに目線を注いでいた。どうしようもない僕に桜井は肩を叩いて、
「落ち着けよ。」
と優しく言われた。僕はその時、桜井がいてよかったと思った。

それは昨日の、５日目の夜のことだった。

僕らは、三人でボーリングをしていた。僕はあまり気がのらなかったが、二人はなにか運動したいと言っていて、僕はてきとうにボーリングを言ったら、僕はある意味、この二人にストライクしてしまっていた。
ということだった。
「私に勝とうなんて２０年早いね」
「たくっ、なんであんなに強いんだよ、お前は」
「まったくだ。ボクなんて３４なんだぞ！」
桜井ヘタすぎ。
「お前ってさ、運動はできない人？」
「当たり前だろ！初めてなんだぞ」

なんでボーリングしようと思ったんだろう、この人。僕がそんな風に思っていたら、
「私帰らなきゃ！じゃ！」
亜依子は慌てて、走り去って行った。僕はそれを見送っていたら、振り返った亜依子からある一言を言われて、僕は思い出した。確か明後日は・・・・
「２日後の誕生日、楽しみにしているよ。」

そして、明日、亜依子が１８歳の誕生日を迎えると同時にある二人を除いたみんなの記憶から消えてなくなるのだ。今の僕は何をどうしたらいいのか、わからなかった。
「・・・・・なぁ」
桜井が少し強い口調で話しかけてきた。
「いっそのこと、真実を全部話した方がいいよ。」
「・・・・なんだと」
僕はゆっくり席を立ち、桜井の胸ぐらを、ガッとつかんだ。
「本気で言ってんのか？」
「本気だよ。ボク、もう辛いんだよ」
「そりゃ当たり前だろ。亜依子は・・・」
「そうじゃないんだよ！！」
僕は、桜井が大声を出すのを初めて聞いた。ましてや、怒りをあらわにする表情も初めて見た。
「いいか？ボク達は彼女を騙しているようなものだ。ボク達は彼女のことを知ってるのに、彼女は自分の真実をなにも知らないんだ。これでは、記憶のない人と遊びで付き合うのと一緒だ。」
僕は一言も反論できななかった。桜井の放つ言葉の一つ一つに重みがあり、真剣さが伝わってきた。
「それにな」
桜井がいつもの落ち着きを取り戻していた。
「よく分からないけど、恋人同士ってのは対等なモノじゃないか？」

僕はこの言葉で目がさめた。嘘をつき通して何が付き合っている、だ。今までの自分の行動が恥ずかしくなってきた。これで吹っ切れた僕は、桜井の顔を正面から見ながらある決意を言った。

「俺、すべて言うよ。一つも隠さず全部言う。」

桜井の表情から驚きの色がみえた。実際、僕自身も驚いていた。自分の素直な意見を他人に言うことはほとんど無かったからだった。

「ＯＫ。頑張れよ。紫音。」

「おう、分かった。」

僕らはお互いの肩を叩き合って、決意をした。僕らのこの関係も、今日で終止符にするつもりだ。

そして、六日目の夜が訪れた。

決意の六日目～午前（後書き）

年明けでこの小説を書いている自分がちょっと哀れ・・・

決意の六日目～午後

六日目の夜、
とりあえず僕は、亜依子と一緒に外を出歩いてみた。いきなり真実を話すことができなかった僕は、一旦外に出て落ち着いてから話すことにした。正直、いまさらだが僕は話すことを恐れていた。
「ん？どうしたの？」
突然、亜依子に話しかけられた。不意に話しかけられた僕は、情けなくうろたえてしまった。
「あ・・いや、別に・・」
完全に怪しまれているだろうな、これは。と思ったが、
「ま～寒いよね、確かに。」
さすがは亜依子。他人の心を深読みしないで、違う形に解釈していた。亜依子は首に巻いていたマフラーを半分といて、僕の首に巻いた。僕にはこの彼女の何気ない優しさがとても愛しかった。明日でそれが消えてしまうことが、とても辛かった。
「あ、亜依子」
僕は勇気を振り絞って言った。
「・・・・なにか甘いもの食べないか？」
我ながらとても情けなかった。

僕らはそこの菓子屋に立ち寄った。明日がクリスマスのせいなのか、店内には小さなクリスマスツリーや僕より少し背の高いサンタクロースの人形が立っていた。亜依子は並んでいる食べ物に目もくれず、店内のこの雰囲気に感動していた。
「わぁ、すごい！綺麗・・・・ここ。」
「お前のほうがよっぽど綺麗だよ。」
「な・・・なに言うのよ・・き、急に・・」
顔を赤くした亜依子はうつむいた。照れているのがよく分かった。

こういう状況でやっぱり亜依子が可愛く見えてしまっていた。僕はなおさら何も言えなくなっていた。
「さて、何買う？」
「このイチゴののったショートケーキがいい。」
まるで子供のようだった。少し駄々をこねた子供のように、こっちを見ながらいっていた。
「・・ああ。いいよ」
「やったー。」
僕がうなずくと、飛び跳ねていた。本当に子供のようだった。僕はさっき、亜依子を綺麗と言ったけど、亜依子は可愛いに分類される人種だった。綺麗な人は飛ばないし、彼女は無邪気すぎるし。
「町も綺麗だし、もっと周ってみよ。」
僕は黙ってうなずいた。

「あぁ～、疲れた。」
約5時間も歩いていたら当然なのだが、彼女には、少しだけ、程度の疲労だった。僕らは人気の少ないベンチで腰をおろした。
「ねぇねぇ、どこが面白かった？」
「そうだな・・・『ＮＡＮＡ２』を観たこと・・・かな」
「あ～、ホント良かったよね。やっぱ観て損はないね。ＮＡＮＡシリーズ。」
「俺個人の感想だけど、曲がよくなってて、良いと思った。」
「そう？私前の方が良かったけど？」
「だから、俺個人の感想だって。」
「あ、そっか」
僕らは、今日観た映画の話題でいっぱいになっていた。
少し話をしていると、沈黙が訪れた。僕は真実を話そうと、口を開こうとするが、声が出てくる気配が全くなかった。僕は心のどこかで恐れているのかも知れない。彼女の喪失を。
「？　どうしたの？」

「・・・・亜依子・・・・・実は」
「あぁーーー！」
突然、亜依子が叫びだした。僕はあまりの大きさに耳を抑えていた。
「ごめん。もう遅いから、明日聞くよ。じゃ」
「まだ１１時半だぜ？早くないか？」
「半まであと５分よ。私見たいテレビがあるから。」
僕は亜依子の時計と自分の時計を交互に見てみたら、確かに、僕の時計が５分早かった。
「ホントにごめんね。じゃ、また明日ね。」
彼女は振り返りながら手を振ると、そのまま走り去っていった。
「・・・・ダッセー・・・・・」
僕は自分にそう言うしかなかった。そして、１２時を超えるまで僕はそこで立ち尽くしていた。小さく降っていた粉雪がうっとうしく感じた。

last date

今日は土曜日だったから、僕はゆっくり休んだ。昨日の事もあるし、今日は1人になりたかった。
今日で7日目・・・最後の日
何も言わず、今までどおりに過ごせば、普通に終わりひょっとしたら、なんの後悔もなくこの日々に終わりが来るかも知れない。けど、それでいいのだろうか？
このままだと、僕は彼女を騙したまま終わってしまう。それだけは絶対嫌だった。僕は、布団の中でどうすればいいのか分からなくなっていた。どちらも正解と言えるし、間違いだとも言える。僕は、静かに誰かの助けを求めていた。
「紫音君いますか？」
聞き覚えのある声が下の方から聞こえてきた。僕はある期待を胸に下を降りていった。

「なんだ桜井。なんか用か？」
「君の心境だと、どうした方がいいのか、まだ決まってないみたいだな。」
お見通しってわけか。
「・・・・・今更だが、分からないんだ。どれを選べば彼女が幸せなのか・・」
「言うべきか、言わないべきか？」
僕はうなずいた。僕は桜井の答えがどうしても欲しかった。自分一人だとなにも出来ないような気がしてならなかった。しかし、桜井の答えは予想に反して、厳しいものだった。
「時間はまだあるんだ。じっくり考えてみなよ。それに、彼女の事を1番知っているのは、お前だろ？」
「そうだけど・・」

「そうなのに自信がないのか？君は」
僕は何も言い返せなかった。段々自分が惨めに見えてきていた。今の桜井には僕はどう映っているのだろうか。あまり考えたくなかった。
「・・・まぁ、とりあえず今日はボクもくるよ。」
「・・・ボク？」
「亜依子に『おれ』は似合わないって笑われてね」
なるほど、桜井の第一印象はそれほど目立たない、おとなしい優等生、という雰囲気がでていた。
「・・・納得だ。」
「ん？何か言った？」
「いや、別に」
話しているうちに、疲れが取れたような感じがした。そして、普段の自分を取り戻せたような感じがした。こういう時、桜井がいて、本当に良かったと思った。
「・・ありがとう」
「どうしたの？急に」
「俺、決めた。」
僕は今度こそ、揺るがない思いを胸に秘めた。もう昨日のような事は絶対にしない。

午後7時、
「遅いぞ。5分も遅刻だ。」
「え、5分？時計ちゃんと直した。」
僕はまた時計を交互に見て、自分の早とちりだと分かった。
「ごめん。疲れてたから早く寝ちゃった」
「もう、ビックリしたよ。ま、無事三人で遊べるからいいけどね。」
口約通り、桜井来ていた。彼は最後は行きたいと申し出ていた。
「思ったけど、たまには食べ歩きじゃなくて、パーっと遊ぶようなことをしないか？」

僕もそれに賛成しようとした、その瞬間だった。
「私、今日これのためにご飯てべないんだからね。」
選択の余地はなかった。今日もグルメツアーになった。

last date～告白

「たまには熱いものでも食べないか？」
「いや、クリスマスだから、それらしい食べ物で雰囲気出したほうが一番だと思うが。どうだ、亜依子」
「うん。紫音、グットなチョイスね。やっぱりそれが一番だよ。」
まず、僕らが最初に向かった所は、昨日行った菓子屋だった。店内は昨日と少し違って、イルミネーションが施されていて、いろんな色に光るクリスマスツリー、トナカイの人形と、さらにクリスマスらしさが出ていた。
「どうだ桜井。俺たち昨日ここに来たんだ。」
僕がそう聞いても、今の桜井にはまったく聞こえていなかったらしい。迷子のように周りをキョロキョロ見渡していた。この姿に、僕らは笑った。桜井はそれに気付かず、まだ見入っていた。

「ここのケーキって、結構美味しいんだね。」
「私も、昨日行って初めて分かったの。」
「もう一回きてよかったな。やっぱ。」
それぞれがケーキを食べながら、歩いていた。普通に見たら、なかなか面白い光景かもしれない。
「次、何処行く？」
「「図書館」」
珍しく、亜依子と桜井の声が重なった。多分、亜依子の動機は、
「どろろ、まだ見終わってないだろ？」
「・・・バレた？」
僕らは次に以前行っていた図書館に足を運んだ。そういえば、
「ここで、お前と会ったんだよな。」
「そうだよな。まだちょっとしか経ってないんだな。」

言われてみればそうだ。まだ桜井と知り合って、1週間も経っていないのだ。僕には2ヶ月も会っているような感じだった。
「あれ？亜依子は？」
言われて気がついた。いつの間に亜依子の姿がなかった。まだ時間はきていないし、考えられるのは、
「どろろ見に言ったな。」
「・・・なるほど。納得だ。」
僕らはそこで少し笑った後、僕らも読書に耽っていった。

「あぁ～、ゴメンネ。漫画に夢中になって。時間のこと忘れてた。」
「いいよ、気にしてないから。」
「結局、俺たちも夢中になってたわけだし。」
亜依子は安心したように、息を深く吐いた。
「・・・なぁ、亜依子。」
僕は冗談の消えた、真面目な表情で、話し掛けた。
「ん、なに？」
「時間空いてる？」
亜依子は少し時計を見ると、笑顔で、
「うん。今日は遅くても大丈夫。で、どうしたの？」
「・・・話がある。」

僕らは、あの公園に向かった。僕と亜依子が初めて出会った、あの公園に。
「わぁ・・・懐かしいね。そう言えば、最近来ていなかったんだよね。」
僕は時計を見ると、あと3分で、彼女が消える時間帯になっていた。
「・・神様、いる？」
僕が呼びかけると、あの真っ白い猫が滑り台から滑ってきた。
「なんじゃ？」
「頼みがある。あと少しだけ、時間が欲しい。時間がきても、待っ

て欲しい。」
「・・・まぁ、いいよ。」
神は以外にあっさり認めてくれた。
「ん！？なにこのネコ？ロボなの？」
「亜依子、言いたい事がある。」
彼女が僕を見ていた。言葉に詰まったのだが、僕は勇気を振り絞って、言った。
「亜依子、お前は本当は・・死んでいる人なんだ。」

ｌａｓｔ　ｄａｔｅ～告白（後書き）

そろそろフィナーレも近づいてます。
北斗の方もそろそろネタ考えんとな・・・・

last date～告白・・そして

亜依子の目が点になっていた。
「どうしたの、紫音。何を言っているの？」
当然と言えば当然の反応である。僕だって急に『お前は実は死んでいるんだ』なんて言われても、間違いなく信用はしないだろう。
「確かに嘘みたいだけど、ちゃんと聞いてくれ。お前は確かにここにいる。けど、そこのネコの姿をした神が生き返らせたんだ。」
亜依子はまだ信じきれていなかった。少し泣きそうな声を出しながら、いろんな質問をしてきた。
「じゃ、私はいつ死んだって言うの？」
「・・・・奇跡的に無傷で済んだ交通事故があったの知ってる？」
彼女は頷いた。僕は真実を告げるたびに心が痛くなってきた。そして、僕は自分が泣いている事に気がついてなかった。
「その記憶は、神が創りだした記憶なんだ。本当はその事故で死んだんだ・・・・」
僕はこれ以上言いたくなかった。言いたくても、言えなかった。
「・・・そうなの？」
亜依子は確認の意味で神に問い掛けた。
「・・・全て真実じゃ。嘘などではない」
亜依子が涙を流した瞬間だった。亜依子は苦しそうに頭を抱え、地面に膝をつけた。
「亜依子？どうした！」
僕が駆け寄ると、亜依子の苦しそうな声が止んだ。静かになると、彼女は顔を上げた。そして、
「・・・・そっか。私、子供を助けようとして、私が死んだんだっけ。」
「亜依子・・・・・まさか・・」
「うん。思い出したよ。ぜぇんぶ」

僕は、正真正銘、本物の時姫亜依子を目の当たりにして、涙を抑えきれなかった。僕と亜依子は駆け寄って、互いに抱きしめようとした時だった。
フッ
と、僕の手が亜依子に触れた感触がしなかった。むしろ、空気か何かとすれ違ったような感触だった。振り返ると、僕はショックを受けた。亜依子の身体が徐々に薄くなってきていることに。時計を見ると、ちょうど12時だった。
「話が違うぞ、神！」
「『涙を流す、『この娘の真実を言う』。重大なペナルティを二回もしているんだ。やっぱりダメじゃな。」
「おい、紫音。亜依子が呼んでいるぞ。」
僕は神を放っておいて、亜依子のところに来た。その頃には彼女の声が段々聞こえづらくなってきていた。
「しお・・・最後に・・・ひとこ・・言って・・・・い？」
彼女が泣きながらしゃべってると、声が全く届かなくなってしまった。今、亜依子が何を言おうと何も聞こえはしない。彼女もそれを承知だろう。亜依子が一つずつ、口を開け、言葉を言った。僕は合わせて、口に出していった。
あ　い　し　て　る
そう言って、亜依子が優しく微笑むと、亜依子の姿は完全に透明になり、消えてなくなった。

力の抜けた膝が地面についた。僕は悔しくて、地面を何度も殴った。自分のどうしようもないほどの無力を思い知った。桜井は声にこそ出してはいないが、手で顔を覆いながら泣いていた。
「あああああああ！」
僕はただ叫ぶしかなかった。雪も降っていない、冷たい風だけが僕らに吹きつづけていた。時計は12時5分を指していた。

Night Of Cinderella（前書き）

最終話です。呼んでくれた人、マジでありがとう。
では、北斗に戻ります。

Night Of Cinderella

午後の7時、あの公園で待つ
僕は神の声で目がさめた。けど、ここは僕の部屋で、神の姿は見当たらなかった。テレパシーってやつだろうか。なんにせよ、今の僕はには何かをしようというやる気がまったく無かった。よりによって、何故あの場所なのだろう。考える気にもならなかった。思えば先週、亜依子が死んで、今の状況と同じ感じで、神が現れ、彼女とまた1週間を過ごした。それが、昨日また死んでしまった。何の笑いにもならないな。
「紫音いる？」
またか・・・・

「なんだ、今度は」
「紫音は聞こえなかった？」
「聞こえたよ。あの公園に7時に来いだろ。」
分かりきっていた僕が投げやりに答えると、意外な返事が来た。
「聞こえた？ボクは直接会ったんだけど。」
「直接？なんで」
「わからない。けど、紫音は必ず呼んでおけって。」
僕を必ず呼べ？どういうことだろうか。気になった僕は一応公園に行こうと決めた。
「わかった。7時までどこかでかけよう。」
僕は少しだけ、7時が待ち遠しかった。

「おい、どうする。7時超えてるぞ。」
「まさかあそこで渋滞にかかるとは、おもってなかったな。」
7時3分、
遅れたらどうなるかとかは分からないが、とりあえず僕らは公園に

走っていった。公園につくと、ブランコの上に神が乗っていた。ちょうど日も落ちていて、毛並みが綺麗に見えた。多分僕だけかもしれないが。時計は7時4分だった。
「ごめん！ホンット遅れた。」
僕らは必死で謝ると神は呆然としていた。
「いいタイミングで現れたな。青年。」
「は？」
神が薄く笑った。この笑い方は、ほとんどろくな事が無いのを覚えている。
「そう思わないか？小娘。」
「まったく、そうよね。まだ、時計直してないし。」
僕と桜井はゆっくり振り返った。後ろには亜依子が立っていた。
「イェーイ。」
彼女はこちらにピースマークをして、その元気な姿を見せていた。
「て言うか、神。これどういう事？」
神はちょっと舌を出して、はっきり言った。
「実はの、ぬしらを試してたんだ。」
僕らは話がまったく理解できていなかった。そんな僕らをよそに、話を続けた。
「おぬしに課せたペナルティはな、小娘をどれほど思っているかどうかを量るためにつけたものじゃが、すべて破ったということはじゃ。この娘をそれほど想っておるということじゃな。時間内ですべてやったおぬしは合格、ということじゃ。」
なんとなくだが、いっている事を理解してきた。けど、最後に疑問。
「ちょっと待て。全部言い切ったのは１２時を超えていただろ？それがなんでありなんだよ。」
「だから、娘も言うてただろ。『時計が早く進んでいる』と」
僕は冷静に分析してみた。ってことは・・・
「実は時間内だったんだ。」
桜井め。僕のセリフを・・・

「そういうことじゃ。だから、特別に12月の『24日』と『25日』の7時からは生き返らせよう。もちろん他の民衆の記憶も置き換えて、な」
僕にはその言葉はとても嬉しかった。僕はこの小さな神様に本気で感謝した。
「亜依子！」
「紫音！」
僕らは駆け寄って、昨日する事の出来なかった抱擁をした。もう僕はこの幸せを絶対に手放さない。このシンデレラの我がままにも、目をつぶろう。僕の親友、桜井にもずっと感謝をしよう。そして、僕らは優しく降っている粉雪の下で唇を交わした。

僕達はこの日がくるたびに、あの1週間のこと、今日の事をずっと語りつづけるだろう。月明かりをシャンデリア代わりに、街の灯を背景に、小さな粉雪の中をずっと躍りつづけるだろう。
いつまでも。

Night Of Cinderella（後書き）

降り積もる思い出よりあなたを愛してる　　―TAKURO―

これ、歌詞なのであしからず。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2331b/

Night Of Cinderella

2010年11月2日17時47分発行